

News Letter

STS Network Japan

Vol.9, No.2 (1998)

夏の学校報告 中村征樹	p2
夏の学校感想 上野啓祐・田中あゆみ・三村太郎・浦野慶子	p4
<合評会 松本三和夫『科学技術社会学の理論』 (木鐸社)を読む>に参加して 山根伸洋	p5
私,プラズマ・核融合研者の味方です。調麻佐志	p7
'98秋のシンポジウム 「医療問題は科学論として語れるか」お知らせ	p8
政府関係委員体験記 中島秀人	p9
次期学習指導要領改訂にみるSTS教育の可能性 大辻永	p10
S T S 情報	p12

STSは, Science, Technology,
and Society の略称です。

STS NETWORK JAPAN

夏の学校'98

報告

夏の学校'98 実行委員長 中村征樹 (東京大学大学院)

統一テーマ 「STSの未来」

7月18日(土)~20日(月) (於:山中湖セミナーハウス)

- 1 「STSの未来 - 応用STS学 (STS工学) - 」松原 克志 (常盤大学)
- 2 「大学教育における理科教育は今...」大辻 永 (茨城大学)
- 3 「紙リサイクルの日独比較 - 『だぶつき』への対応」丸山 康司 (東京大学大学院)
- 4 「素人は、科学報道を批判的に読み解けるか」松山 圭子 (浜松医科大学)
- 5 「STSと科学技術政策 - 欧州科学技術情報の自己組織化プロジェクトと日本の取り組み」藤垣 裕子 (科学技術政策研究所)
- 6 「科学知識の公共性をめぐって」木原 英逸 (国士館大学)
- 7 「科学史のための科学者、科学者のための科学史 - 科学史MLから学んだこと - 」水野 義之 (大阪大学核物理研究センター)
- 8 「Science Wars in Japan?」調 麻佐志 (信州大学) / 小林 信一 (電気通信大学)
- 9 「サイエンス・ウォーズをめぐって」塚原 東吾 (東海大学) / 金森 修 (東京水産大学)
- 10 「合評会 松本三和夫『科学技術社会学の理論』を読む」平川 秀幸 (国際基督教大学大学院) 他

「来年の夏の学校の委員長は君だから」。その一言で、それまでSTSNIには一度か二度しか顔を出していなかった私が実行委員長に「内定」されたのは、たしか去年の6月頃のことだった。そして、それまで一度も声をかけられたことのない事務局長の案内を突然受け取ったのが、今年の一ヶ月。その議題に「事務局員選出」が挙がっているのを見たときに予想しえた通り、事務局会議に参加すると、「夏の学校の実行委員長は中村君ってことで...」と一瞬で内定は「決定」に変わり、かくして今回の実行委員長を引き受けることになったわけである。しかしながら、勝手がなかなかつかめず、プログラムの作成などに予想以上に手間取ってしまっただけで右往左往している内に、当日を迎えてしまった。

今回の夏の学校は、4月のシンポジウムを引き継いで「STSの未来」をテーマに開催された。上記のプログラムのもと、総勢36名の参加者を迎え、初日からハプニングに見舞われたものの、参加者の皆さんのおかげで、熱気の中に、無事、終了することが出来た。後述するように、大変盛り上がった議論の繰り広げられた密度の濃い3日間だった。

以下、今回の夏の学校で繰り広げられた議論から、個人的に興味深いと思った点を中心に紹介したい。(合評会については別に報告がある(はず)なので、その紹介は本稿では省く)。なお、以下の記述に誤りがあればそれは筆者の責任であり、当然ながら文責は筆者にある。そのおりにご指摘をいただけますと幸いです。

さて、今回の夏の学校は松原さんの報告から始まった。しかし、ここでいきなりハプニングが。というのも、ひどい交通渋滞で、集合時間にはまだ数人しか集まっていないという状況。報告の開始時刻になっても、司会者も初日の報告者もそろっていないとい

う事態になってしまう。しかたなく、様子を見て2時間以上開始時刻を遅らせることになった。かくしてハプニングの内に開始された松原さんの報告は、STSの実践性を問うもので、「STSの未来」をテーマに掲げた今回の夏の学校の最初を飾るのにふさわしいものだった。報告ではSTS研究のタコツボ化をいかに防ぐことができるのかという問題提示に続いて、科学に対してアカウンタビリティを要求するSTSのアカウンタビリティはどのようなものであるべきかという問題が提起された。そしてそのような問題を考えていく際の導きの糸として、「STS工学」「STS実習」というアイデアが提示された。前者は、たとえば社会学が日常を対象としながらも自らはそこへ参与/介入していかないようなあり方に「STS学」を模し、それに対してより参与的/実践的なSTSのあり方を追求するものである。また後者は「STS工学」の具体的な一つのあり方として、STSで習得した知識を社会での実習の中でどのように活用することができたかをSTS教育における評価に組み込むものである。これらの点は、STSというものが当初の思惑から逸れて自足的なひとつの「研究領域」へと陥ることなく社会への関与を可能としていく上で非常に重要な点だろう。

続く大辻さんの報告では、参加者に「テスト」が配布された。小学校の理科教育で、各教育内容(「魚の育ち方」など)がどの学年のどの領域(生物/エネルギーなど)で教えられるかを推理するものだった。これには参加者全員が思わずはまり込んでしまった。が、「でき」は、大辻さんの学生さんたちのほうが(かなり?)優秀だった模様...。それはともかく、「テスト」で初等理科教育の内容構造について「学習」したのち、小学校の学習指導要領のコピーが配布された。筆者も含めて指導要領というものを始めてみたほとんどの参加者は感心。(この上手い話の持って行き方は、さすが教育学部、という印象を筆者は抱いた)。さらに大辻さんは最近の教育行政の動き(中央教育審議会/教育課程審議会)について紹介され、教育行政における意思決定のありかたを垣間見ることができた。

夕食をはさんで丸山さんからの報告。紙リサイクルをめぐって、日本では古紙の需要の「だぶつき」ゆえに再生業者が倒産してしまっている。そのような状況をめぐる簡単な解説の後、日本とはまったく違う対応を見せているものとしてドイツのDSD(Dual System Deutschland)というシステムが紹介された。それは、回収業者とメーカーの間にDSDという機構を置き、そこがライセンス料と引き換えにGPマークのシールをメーカーに発行することで、シールの付いた「ごみ」を回収した業者がその費用を回収しうる確実な保証を選択肢として確保するものである(ここで回収業者には、市場と取り引きすることで利益を得る道も確保されている)。多少複雑ながらも巧妙なその機構により、ドイツにあってはリサイクルがシステムの内に組み込まれているのである。ただしそれはリサイクルに主眼があるというよりも、ライセンス料を課すことでごみの減量を図るものだという。ともかく、そのような大変興味深い事例の紹介の後、丸山さんからは、同様のシステムを日本でやるとしたらどのような問題がでてくるのかという問題が提起された。

2日目は松山さんの報告で幕を開けた。「医師の提示した、素人が分かる範囲に限定された物語だけが流通する医学報道・医学啓蒙から脱するには、ジャーナリストが積極的に、批判的、対抗的デコーディング(=医師の提示した物語を批判的に読み解くこと:中村註)を行う必要がある」が、それはいかにして可能かという、博士論文の審査時からの課題を提示した上で、それを考えていく際の足がかりとしてSTSNIのメンバーがこれまで書いてきたものからの抜粋を紹介された。その論点は大きくいえば、次の二点である。一つは、専門家と非専門家の関係を問題にするもので、これまでの議論が医療や科学技術の問題についてその判断をまっぴら専門家に任せることができるという前提を共有してきた



のに対して、それらの問題は実のところ、問題の本質からして専門家の判断だけでは解決することができないとして、むしろそのような判断への非専門家の介入を積極的に主張するものである。またもう一つの論点は杉山さん（北大）が提示しているもので、科学技術のインフォームド・コンセントを実行していくにあたって、一般庶民は問題となっている科学技術の全容を理解する必要はなく、「選択のために必要なことだけ」を理解すればよい点を強調するものである。これらの点は松山さんの提起した問題にあっては、前者が批判的・対抗的ディコーディングの必要性を顕揚するのにに対して、後者がその可能性を見出す際の手がかりとなるだろう。そして最後に、以上の論点をめぐりいくつかの問題が提起された。

続いて藤垣さんから、サイエントメトリクス、サイエンスウォーズ、EUの「科学技術情報の自己組織化プロジェクト」というそれぞれ興味深い三者をめぐって報告がなされた。サイエントメトリクスは、数量的手法を人間社会に応用する手法それ自体を議論の対象とする点で、実は自然科学における数量化そのものへの反射的な視点を持つことが指摘された。そのような側面に着目することによって、サイエントメトリクスという定量的アプローチとSTS研究のもう一つの潮流である定性的アプローチを架橋することが可能となることが示唆された。また、サイエンスウォーズについて、80年代以降のアメリカの科学技術政策の変容を具体的にみていく中で、それが科学技術行政 / 科学者 / STS研究者の三者の力関係の変化の結果として読み解くことができると同時に、春のシンポジウムでも展開された異分野摩擦論の観点から、それを境界侵犯問題としても捉えられることが指摘された。科学者をとりまく暗黙の境界をSTS研究者が「侵犯」したがゆえに、それに対する不快感の表明としてサイエンスウォーズは勃発したのである。また、EUのプロジェクトに関して、その概要と具体的な内容、日本からの貢献などが紹介された。

せっかく山中湖のすぐ近くまで来たのだから、ということで昼食は外で各自自由にとることにし、付近の散策などで少しばかりリラックスしたところで、午後の報告が始まった。お昼前に到着したばかりの木原さんからは、科学知識とその公共性をめぐる報告がなされた。科学の公共的性格を捉え返すにあたって木原さんは、近代社会における公私概念がいかなるものなのかを把握した上で、その中における科学の位置づけを確定する作業を進めようという。そのような考察は、さまざまの特権をもった中間集団が国家によって打ち砕かれていくという近代の真ただ中で、科学者集団という自立性・自由を持った中間集団が成立したというパラドクスから出発する。そして近代化の過程における「自由」の意味の変容（外部権力からの中間集団の自由 / 中間集団からの個人の自由）のなかで、他人によって干渉されない私的領域の確保ということが自律的な自己決定としての近代的な自由の必要十分条件とみなされたこと、そしてそこにおいては所有権と可処分権が置換可能なものとみなされるにいたったことを明らかにした。しかしそのような近代的な所有概念の自明性は、土地や身体を租上に載せたとき覆される。所有権と可処分権の等置は公共性が介在するとき掘り崩されるのである。そのような議論を展開しながら、科学と市場における公共性をめぐる考察が進められた。

そしてついに、これまでの議論でも何回か話題に出てきたサイエンス・ウォーズが租上に上ることになる。科学史メーリングリスト上で「科学者」の立場から議論を展開してきた水野さんの報告では、同MLで繰り広げられたSSC論争を紹介しながら、水野さんの見解が鮮明にされた。科学史メーリングリストにおけるSSC論争は、科学研究の巨大化をめぐる議論の文脈でSSC計画の中止が挙げられたことに端を発した。それに対して水野さんは、それが巨大科学の問題なのではなく、アメリカにおける科学のあり方ゆえにもたらされた特殊な事例であることを、欧州で進行している

LHC計画を事例に出して強調された。また、SSCの研究目的であるHiggs粒子についてその研究意義を解説するとともに、これまで科学者の側が普通の人たちに対して自分たちの研究の意義を分かりやすく説明することを怠ってきたことを批判した。そしてここで際立ってきたのが、そこで主張される「説明」の性格である。普通の人たちに分かりやすく「説明」することを怠ってきたことを批判しながらも、それは必ずしもインフォームド・コンセントの議論へと回収されない。そうではなくて、人々に「インフォーム」はするけれども「コンセント（同意）」は求めない、という点が強調されるのである。これは、科学研究を進めるにあたってその当否を判断するだけの知識が普通の人には不足しており、それはやはり科学者の側に判断を委ねるしかない、という認識によっている。そのことを前提とした上で、その判断の正当性を納得してもらおうと普通の人たちに説明するということである。

調さんから、はからずも日本におけるサイエンス・ウォーズに巻き込まれることとなった自身の経験が報告された。この経緯は、以前調さんが書いた懸賞論文が、とあるホームページ上の掲示板でやり玉に挙がっているということを知ったところから始まった。当人の知らないところで、調さんの論文が「批判」というよりは「中傷」の対象となっていたのである。それから調さんは掲示板でかなり集中的に批判に応え、その後は見ていないとのことだったが、筆者自身該当の掲示板のログを見てみて、その時の調さんの心労が察せられたと同時に、今回の発表のために当時のログの冒頭部をプリントアウトしていて胃が痛くなったという感想に大きく納得した。

続いて塚原さんからは、サイエンス・ウォーズをめぐる議論で前提とされがちな「科学者 対 非科学者」という図式は問題の本質を見落とすものであるという指摘がなされた。塚原さんはそこでの対立軸を「プロ・サイエンス 対 アンチ・サイエンス」と分類した上で、そのような境界は確定的なものではないことを指摘した。その対立軸はさまざまなレベルで多様な様相を呈しているのであって、複合的な構造において成立している。そして科学論者の中にもプロ・サイエンスとアンチ・サイエンスの対立はあり、そこでもミニ・サイエンス・ウォーズが展開されているのである。そしてそのような対立構造の分析こそが科学論者の仕事であるという指摘を行った。

次に金森さんは、アメリカにおけるサイエンス・ウォーズの顛末を紹介された。サイエンス・ウォーズの背景にはアメリカにおけるポスト・モダニズムやカルチュラル・スタディーズをめぐる論争が背景にあることが指摘された。サイエンス・ウォーズの口火を切った『高次の迷信(Higher Superstition)』においては、不十分で一面的ながらも傾聴すべき科学論批判が展開されてもいた。しかしそれが可能とした議論の広がりを、ソーカル事件は先に挙げた事情を背景にしてポストモダニズム批判へと切り縮めてしまったのである。(詳しくは、『現代思想』7月号/8月号掲載の金森さんの論文を参照のこと。)さらに金森さんは、フランスへの留学時代に実証科学の厚みを実感したという経験を語り、その厚みを尊重することを確認しながらも、科学のスポークスマンとしてではないあり方で議論を展開していく必要性を強調された。

以上、報告を中心に振り返ってきたわけですが、この程度の概観でも分かる通り、議論の多岐にわたった非常に密度の濃い13日間でした。このような充実した夏の学校に企画者の一人として参加できたことをありがたく思います。プログラムの発送の遅れや当日になっての大幅な変更など、参加された皆様にはいろいろとご迷惑をおかけしましたが、皆様のおかげで非常に大成功を収めることができましたように思います。とくに、お忙しいなか報告を引き受けてくださった報告者の皆様、副実行委員長としてかなりの面でサポートしていただいた平川さん、そしてとりわけ今回の宿の手

配では文字通り奔走していただいた塚原さんには、本当にお世話になりました。ありがとうございます。

最後に、STS-NET(ニフティを利用した電子会議室)上に寄せられた感想を紹介することで稿を閉じようと思います。「今回の夏の学校は今までも一番面白い部類の夏の学校で、とりわけ、金森さん、松原さん、松山さんの発表が最高でした」(調さん)。「ほんとエキサイティングな3日間でした。しかし、とてもエキサイティングだった分、3日間では燃えつきれない~!

という感じでもありました。とくに2日目夕方のサイエンスウォーズ・セッション以降の時間が足りなかったあ! もっといっぱい言いたいこと、議論したいことがあったのですが...

もう1日あったらなあをつくづく思います。(体力がもたないか?)」(平川さん)。「とくに印象に残ったのは、Science Warsをめぐる報告と討論。現場の科学者(高エネルギー物理専攻)である水野氏も加わり、塚原さんの挑発的なコメントもあり、緊張に満ちて面白いものでした。とくに金森さんのhigh tensionな密度の濃い報告は刺激的でした。私にとって、今回の夏の学校は、報告者の一人でもあった藤垣裕子さんのいう「異分野摩擦」がキーワードになりました」(梶さん)。

今回参加された方は勿論、参加できなかった方も是非、来年も(は)ご参加ください。来年の夏の学校で皆さんに再びお会いできるのを楽しみにしています。

参加者の感想

上野啓祐(東大・科哲M1)

この機会を提供していただいた実行委員の皆さん、そして討論を盛り上げてくださった全ての参加者に御礼申し上げます。

さて今年私は始めてこの合宿に参加したわけだが、それぞれのセッションを通して幾つかのキーワードが浮かび上がってきたように思える。それらは我々が扱っている問題の公約数ともいってよい。そのキーワードとはすなわち、専門家/素人、領域侵犯、Science Wars、自己言及、である。これらは内的に連関しており、とりわけインフォームド・コンセントを扱った松山圭子氏、科学者(物理学者)の立場から発表した水野義之氏の議論の中で先鋭化した。私も職業(?)柄よく同じような難問に苛まれている。それは科学を知らずに科学について語り得るのかということである。だからといって分化したいわゆる科学を研究し始めると「科学」の全体はむしろ見えにくくなってしまふ。このアポリアに解はあるのだろうか。科学と科学論の境界線はどこに引くべきなのか、あるいは引くべきではないのか。

「領域侵犯」を手掛かりに考察してみる。

それぞれの研究者にはそれぞれの研究分野がある。たとえば物理学者には物理的世界が、社会学者には社会がそれに当たる。これらはいわば彼らの領域とも言うべきでこれを犯されると一般に彼らは不快感を表明するだろう。しかしここで言う「犯す」とはどのような意味なのだろうか。そこには少なくとも二つの意味が含まれているように思われる。一つはその専門分野から見て門外漢(素人)が「誤った」知識を喧伝している、ということ。もう一つは

その分野の方法論や研究のスタイルについてその分野以外から批判されること、である。しかしこの確立された、あるいは暗黙の方法論やスタイルは彼の人格的・経済的生存に深く関わっている。なぜなら、これを守ることによって専門家は一方でその専門内での評価を得、他方外部からは報酬を得ることができる（外部からの評価は間接的なものにすぎない）からである。とりわけ報酬はその専門性に対して払われる、外部からの評価であり関係を端的に示す尺度でもある。

経済原則からいうと、外部から報酬を得るにはその商品が売れなければならない。それはに実利性と同時に希少性が必要とされる。とりわけ研究が直に実利に結び付かないような分野では希少性が求められ、専門家/素人の区別は構造的に形成されて行く。これは経済原則から導かれたことであり、知の在り方はこれだけでは測れないのかもしれないが、専門家はある事象についてのある一定の見方に長けているのにすぎない。われわれは、塚原氏が言ったように、「素人」ではなく何かの専門家であり、いわゆる専門家とは別の尺度・文脈で同じものを見ているのにすぎない。研究を越えた、現実の行為（行為の判断）の場面においては、それら異なる世界観の中から一つの決定を下していかなければならないのである。

田中あゆみ（東海大学4年）

今回、塚原東吾先生より、夏の学校への参加についてのお話をさせていただき、初めて参加させていただきました。STSについて何も知らぬまま参加したため、言葉の意味もわからず、発表されていたことを十分に理解することもできず、ただただ、多くの方々の発表と討論に圧倒されるばかりでした。

今まで私は、自分がおもしろいと感じた分野の知識についてのみを身につけようとし、他の広い分野については何も考えず野放しにしてきたような気がします。夏の学校に参加させていただいたことで、また少し自分の視野を広げ、今まで野放しにしてきた部分の一部でも知り、考え、表現してみたいと思いました。

今回の夏の学校は、私が今までに体験したことのないことばかりで、戸惑いながらも「楽しい体験」であったように思います。夏の学校が終わってから、もっと多くの知識を身につけていこうという思いが自分の中に残っている・・・このような気持ちがある私の「楽しい体験」につながっているのではないのでしょうか。

多くの方々の発表を聞かせていただいた中で、聞き手への興味の持たせ方、話の進め方など、得るものも多く、とても勉強になりました。これからもっと自分の視野を広げ、知識を身につけて行きたいと思います。多くの方々にお世話になり本当に感謝しています。ありがとうございます。

三村太郎（東京大学3年）

この合宿に参加する以前は、STSに対してほとんど具体的なイメージを持っていませんでした。つまりSTSを科学をexternalに捕らえ直す動き、というくらいの単純なイメージだけでした。しかし合宿中の議論を聞いてみると、そんな単純なものではなく、様々な見方、方法論のぶつかり合う場がSTSなのではないか、という見通しを得ました。すなわち、STSにおいて様々な人が出会うことで新たな可能性が生まれてくるわけで、そういう場面に立ち会うことができたことはたいへん重要でもあり、興味深いことでした。

浦野慶子（慶応大学2年）

「夏の学校」という言葉から想起させるイメージをふくらませながら、セミナーハウスに向かいました。大それたモチベーションというのはありませんでした。そのために参加している目的が見えていない自分に気がついて、自問を繰り返す3日間となってしまいました。

しかし、いまこうしてあの3日間を思い出してみると、つかみかけた何かが残っているのです。それをうまく言葉に表現できない自分に落胆してしまいましたが、大きな収穫があったことは確かです。

<合評会 松本三和夫『科学技術社会学の理論』 (木鐸社)を読む> に参加して

山根伸洋（一橋大学大学院）

98年度夏の学校の最終日である7月20日午前中に、合評会は開催された。前夜からの夜を徹した議論の熱気が残る中、前夜からの、そして当日朝かけつけた参加者の人たちが三々五々会場に参集してきた。

今回の合評会は、永らく社会学の領域に足場を持ちつつSTS研究に邁進されてきた松本三和夫氏が合宿の直前(98年6月30日発行)に出版された『科学技術社会学の理論』をまずは若手で紹介し検討の俎上にのせてみよう、そんな意図で急遽企画されたと記憶している。何しろ<科学・技術・社会>の学と銘打った書物の登場だ。夏の学校の始まる前から、この本をどう位置付けたいのであろうか、と一部報告者、仕掛け人等々の間で、否応無しに議論が盛り上がったように思い出される。つまり本書は世間にありそうではまったく書かれたことのない、学のフロンティアを切り開くものとしてあったのだろう。

さて、当日の合評会は本書が出版後間もないということ、そして活字の量としても、扱われる内容の広がりにおいても、大著ともいえるものであったので、オーソ

ドックスに各章ごとに若手の報告者を一名割り振るとい
うかたちになった。具体的には、「序章 科学技術社会学と
は」(石原明子)以下「第 部科学技術社会学の一般枠組
み」、「1章科学者集団の内部構造」(春日匠)「2章科学と
社会の制度化」(中村征樹)「3章科学、技術、社会の相互作用」
(隠岐さや香)以下「第 部科学技術の意図せざる結果
を考える」、「4章地球環境問題を考える-科学技術社会学か
らながめてみれば(1)」(上野啓祐)「5章原子力研究・開発を
考える-科学技術社会学からながめてみれば(2)」(野村元成)
「6章日本問題を考える-科学技術社会学からながめてみれ
ば(3)」「終章自己言及性・自己組織型科学技術社会学と不
確定性」(平川秀幸)ということで各担当者が担当箇所を逐
次紹介していくというかたちになった。当日の司会は本書
の編集をサポートした柿原泰氏が担当した。

予定時間が2時間ということ、7人からの報告を受けてい
くということもあり、合評会そのものは、各章ごとの紹介
と若干の討論が司会による手際の良い進行もあいまって、
やや駆け足のものとなったといえるだろう。もちろん今回の
合評会で本書の評価が定まるということではなく、「今
回の議論が本書を考える上での手がかりになり、東京に
帰って是非本格的な書評会を」という意見も終盤で出てき
た程に、参加者が本書に注目していることは明らかとなっ
た点は、一つ今後のSTSをめぐる議論の活性化の上でも重
要な契機となったといえる。

議論の中で特に目立ったものとしては、序章においての
科学技術社会学と科学技術活動との関係性、第3章に見ら
れる「STSマトリックス」を規定する5つの社会セクターと
3つの科学技術分野の類型化の妥当性等々の論点が出され
た。

また、「科学技術社会学」と「STS」との関係性が不
分明なのではないか、という意見も出た。著者である松本氏
が提唱する「科学技術社会学」とは何か、ということが問
われている議論にも思えたが、その実「STS」自体が現在
的にどのような社会的位置を占めるべきなのか?もしくは占
めているのか?ということが逆に問われていることが、議論
を通じて、次第に明らかになっていったのではないかと思
われる。

本書はこれまでの社会学のもしくは科学技術研究の分野
において欠落していた空地に重要な参照すべき一つの道標
を打ち立てたのではないだろうか。実は私自身、STSにか
かわる前にこのような書物が出版されていたならば、真っ
先に手にして、でもこっそりと読んでいたように思う。思
考する際の既存の一般的準拠枠自体を「脱構築」すること
が80年代中盤から90年代初頭にかけて「熱病」のごとくは
やったが、その中で、こうした書物が準備されてきたこと
を考えるのであれば、まだまだ大学アカデミズムも捨てた
ものではないなと思う。いや、ここの領域の議論を批判す
ることはたやすいのだが、ある中間的な知の領域の全体性
をデザインすることがこんな困難な時代によく……。参照
すべき地図を見失いがちな時代に、さしあたって批判的に
であれ勉強がてらであれ、「オーソドックス」な本が出て
きたことを、私たちは歓迎すべきなのではないだろうか。

会費納入について

このニューズレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示して
おります。例えば、

「97,98末」と「98末」は、それぞれ該当年
の会費(3500円)が支払われていないことを表しま
す。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払い
がなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取
らせていただき、以後Newsletterの発送を中止しま
す。

「98不足」は、お支払いいただいている会費が
3500円には不足しているもので、「不足」の後の数
時が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お
支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何ら
かの理由でSTS Network Japanに関係がある方に、臨
時にお送りするものです。この期間は通常1年間で
すので、送付が始まって1年以内に入会の手続きを
とられなければ、以後Newsletterの送付を停止させて
いただきます。

事務局の電話番号・FAX番号
が変更になりました

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒182 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1 電気通
信大学情報システム学研究所
小林信一研究室気付

TEL/FAX 0424-43-5666

(事務局の電話番号・FAX番号が変更になり
ました。ご注意ください)

「私, プラズマ・核融合研究者 の味方です。」

調 麻佐志(信州大学人文学部)

私のことをいくらか知っている人なら,いきなり,らしくないタイトルで面食らったかもしれません。このような気持ちになった(洗脳された?)理由を思いっきり簡単に説明させて下さい。

話は今年の2月に始まる。ある日,知らない人から一通の電子メールが届いた。「37回目を迎えるプラズマ・核融合若手夏の学校で,今回,科学技術とそれに携わる人の責任について特別講演を企画しました。つきましては,講演に来て下さい」という依頼であった。有り難いことに『科学技術時代への処方箋』を夏の学校の責任者である学生さんたちが目を通して,それで私に白羽の矢が当たったらしい。二つ返事で引き受けたのは言うまでもない。

その後,私は「インターネット上の戦い」をくぐり抜け,3月のSTS国際会議でScience Warsについての見聞を深めて,いつのまにか気分だけは一端のscience studies soldierになっていた。とはいえ,私は喧嘩(を売るの)はあまり好きではないので,この夏の学校では,一般的な科学者の責任について淡々と話すつもりで決意を固めていた。「製造物責任法やインフォームド・コンセントの考え方を科学技術共同体に適用すればどのような帰結が導かれるか?」といった話をするつもりだったのだ。

しかし,核融合研究について何も知らないまま講演するのはあまりに失礼と考えて,直前の一週間で付け焼き刃ではありながら最低限の知識を仕入れ,この研究分野の置かれた状況を把握するよう努めた。その結果分かったのは,核融合研究の惨憺たる状況=経済的な行き詰まりであった。

ITER(国際熱核融合実験炉)計画にまつわる最近の動きをご存じならば,すぐにお分かりいただけると思うのであるが,現在最も有望な核融合による発電を実現する形式(トカマク型)は,技術的にはなく経済的な問題で行き詰まりを示している。端的に言えば,銀河連邦でも成り立たない限り(copyright 野村元成氏),核融合エネルギーを商業的に利用するだけの資金が提供できるスポンサーがないことが明々白々なのである。

ここにいたって私は発表内容について方針転換して,核融合研究の問題点をひたすら指摘するという形で講演を行うことにした。要は,土足で上がり込む決意を固めたのであった。

その顛末はというと,彼ら/彼女らは実によく分かっていた。実によく分かっていたというのは,私が提供した情報について精通していたという意味ではない。そうではなく,スポンサーたる社会にどのようにこれから接すべきか,そもそも核融合研究をどのように進めれば科学者としての責任が果たせるか,若手の研究者達は真剣に考えていたのである。実用化は50-100年以上先と思われる研究にこれだけの資金を提供してもらって良いのであろうか,これが彼ら/彼女らの悩みであった。その真剣に悩む姿勢に心(?)を打たれて,私は核融合研究のサポーターになる決意を固めたのである。

ただし,付け加えるならば,今回私のような人間を呼ぶにあたって核融合研究界の長老にお伺いをたてたところ,そんな奴を呼んではいけないという説教をくらったという内輪話を主催者から聞いている。だから,あくまで私は「若手」だけの味方ではないと思っています。

追記

多くの若手核融合研究者が雑誌Newtonなどの記事を見て,これからは核融合の時代であると確信を深めて,あの分野に入っていったということがわかり,いたく感動してしまった。

STS Network Japan 公式ホームページ

先の総会での決定を受けて, STS Network Japanの公式ホームページが開設されました。

会員に向けた活動計画の迅速な告知と,非会員への活動内容の宣伝が当面の目標です。当面は, NLに掲載された記事などは極力掲載する予定です。NLに投稿される方は, あらかじめご了承下さい。

方針は, 今年度末の総会で再考される予定です。それまで, みなさまのご意見, ご批判をなるべく多くいただければと考えています。

なお, 当面管理は広報担当の春日がおこないます。

ご意見は, 事務局あるいは春日までいただければ幸いです。

URL<<http://kob.is.uec.ac.jp/sts/>>

広報 春日 匠<skasuga@mars.dti.ne.jp>

パソコン通信"ST S-N E T"へのアクセス

STS NETWORK JAPAN では, 会員相互の情報伝達の迅速・活発化をはかるため, 電子会議室 "ST S - N E T" を商用パソコン通信NIFTY-Serve上で開設しております。興味のある方は, STS NETWORK JAPAN 事務局まで。また, NIFTY-Serve会員の方は, N E T 管理人・調麻佐志氏 (ID: JAH03064) へ Mailでお申し込み下さい。

STS Network Japan '98

秋のシンポジウムのお知らせ

テーマ：「医療問題は科学論として語れるか」

日程：10月31日（土）

時間：13時30分より（13時00分開場）

場所：京都大学芝蘭会館

パネラー（交渉中含）：蔵田伸雄（三重大学）、佐藤純一（宮城県立大学）、
川崎勝（山口大学）、小林傳司（南山大学）、
松山圭子（浜松医大非常勤講師）、他

来る10/31に京都大学芝蘭会館で、恒例のSTSJN秋のシンポジウムを開催します。

今回のテーマは、「医療問題は科学論として語れるか」といたします。

現在個別のフィールドで様々に行われている生命倫理や医療社会学といった医療論と、科学論の接点はあるのか、またあるとしたらどのようなものなのかを考えて行きたいとおもいます。

これまでSTSJNのシンポジウムでは、科学論一般を広く論じるようなテーマが多かったのですが、今回はテーマを医療問題に集中させることで、視点を変えた議論で科学と社会の関係のありかたに切り込めることを期待しています。

今回は、日頃は交流の機会の少ない遠隔の人どうしの交流の機会をつくるという意味も込めて、関西で開催の運びとなりました。お忙しいと思いますがこの機会に足をお運びくださいれば幸いです。

また、会員以外の方もご参加いただけますのでぜひどうぞ。参加費、申し込み等は不要です。

京都大学芝蘭会館

- ・バス 京大正門前下車 206番（京都駅から30分）
201番（阪急河原町駅から20分）
- ・京阪出町柳駅から徒歩10分
- ・タクシー 京都駅から15分（1,800円程度）



問い合わせ先：春日 匠（京都大学人間環境研究科）
電話 /075-702-1644 PHS/050-661-8808
E-Mail/skasuga@mars.dti.ne.jp

政府関係委員体験記

中島秀人（東京工業大学）

ここ数年、科学技術庁を中心に、いくつかの政府関係委員会の委員を体験した。最終報告書も発表されない「勉強会」レベルのものから、宇宙開発委員の分科会の委員まで、レベルもいろいろである。

どのようにして委員に選ばれるかという、知り合いの先生の推薦というのがいちばん多い。最近では、役所の方で大学の名簿を見て関係がありそうだから電話しました、というのもあった。

どの委員会でも、報告書を作るのが最終目標である。現在出席している宇宙開発委員会のある分科会では、国際共同で作られる宇宙ステーションでどのような科学実験をすべきかについて報告することが求められている。委員会のテーマは大体からこういうもので、昨年関与した運輸省のある委員会では、規制緩和のもとで、どのように各種輸送機関の安全性を確保するかがテーマだった。

どの場合も、科学技術論の立場から発言することが求められる。だが、門外漢のテーマについて専門家の委員と同様の発言ができるはずもなく、何となく一般的なことをいってお茶を濁すことになる。もっとも、本当のことを言えば、専門家の方も似たようなもので、航空安全の問題について、鉄道技術の人はほとんど素人である。

こんな委員会でも報告書が出せるのは、担当の役人が有能だからとしかいいようがない。若手の役人が、委員長を中心とする10名程度の委員(もっと多いこともある)のところに出向いて意見を吸い上げ、さらに勉強して報告書の原案を作る。役人を誉めたくはないが、本当に頭がさがるほど良く働いて、分厚い草稿を準備してくれる。これを定例の委員会で検討、修正する。

委員会には、月1回のペースのものもあれば、年4回程度のものもある。議論は、一回あたり2-3時間。その間に麦茶もしくはコーヒーが一回出てくる。何らかの都合で食事時間帯に会議が開かれると、幕の内弁当程度の食事が出る(旨くはない)。酒類は決して出ない。会議の終了後に懇親会があることも希にはあるが、これは局長さんなどのポケットマネーによるものに限定される。企業関係の委員などは、役所の貧乏さに同情することしきりである。役所の中はこんな状況であるから、役所の建物から出て企業に接待されると、役人はイチコロである。貧富の差が余りにひどすぎる。

報告書に話を戻そう。報告書は役人の作文であるので、「規制緩和」のような政府の基本方針に反することは書かれていない。これは当然で、国民の忖度(そんたく)を受けた政府の決定を役人個人の意志で変更することは規則に違反する。役所に就職すると最初にいわれることは、机のように仕事をするように。つまり、誰がやっても同様の書類になるというように、ということであるようだ。委員の方もその点はわきまえていて、規定の方針に反することはいわない。というか、反対の場合には、ぎりぎりのところを見きわめて何とか意見を反映しようとする。例えば、「規

制緩和は当然だが、これは安全を脅かすものまで許さないのは当然であるから、××までは手を触れるべきではない」といった微妙な言い回しで抗弁する。もしここで、「規制緩和の方針自体が絶対間違っている」と執拗にいい続ける委員がいれば、その人はやがて委員としてはふさわしくない人物として役人の頭に焼き込まれることになる(冗談にまぎれて反対するのは構わない。ある役人など、「まあ原子力は自然死ですか。う、こんなことってはいかんか」とのたまわった)。それほど政府の方針というのは全体の議論に枠をはめる。だから、政権が交代して「規制緩和をやめる」と決めれば、委員会も別の方向に走らなければならない。「選挙なんかで何も変わらない」というのは、役所の仕組みを考えれば大間違いなのだ。

ところで、この種の委員会システムの問題点は何だろうか。問題点は多々あるだろうが、専門家が必ずしもそれにふさわしい役割を果たしていないという点は、そのひとつではないだろうか。運輸省の委員会に出ているときに痛感したことだが、STS関係者に安全問題についての研究者がもっとたくさんいれば、私は委員になるのを辞退して、適当な別の人を紹介することもできたわけだ。その人に能力があれば、報告書の作文を役人任せにすることもなく、本当に国民の安全を考えた報告書ができるのではなかろうか。政府の委員会なので限界はあるが、それ以上に、役人に代わるシンクタンク機能が日本には欠如しているのである。アメリカのワールドウォッチ研究所であれば、政府の方針を引きずるほどの影響力があるように思える。であるから、STSの分野でも、世論をリードするほどのマンパワー、研究制度を整えていく必要があるだろう。「じゃあ私が報告書の草稿を作りましょう」というためには、委員本人の周囲に適当な専任スタッフがいることが前提である。

ところで、そんなに不十分であることを知っていながらなぜお前は無責任に委員を引き受けるのか、と言われそうである。確かにその通りである。実際、学者は政府お手盛りの報告書の権威づけに使われている部分がある。それでもつい委員を引き受けてしまうのは、科学技術についての政府の意志決定の仕組みを知りたいこと、さらに、各種委員会で専門を異にする分野の研究者(特に有力者)と知り合えるからである。どの国でもそうだが、新しいことをしようとするときにいちばん重要なのは人脈である。STSの影響力を広めるのに、この人脈は役にたつのでは、と考えてしまうのである。実際、STSの国際会議を実行するとき、小林実行委員長の人脈の厚さを見せつけられたのは強烈であった。

もっとも、こういうのは言いわけで、委員に選ばれることで、本当のところは人間の権力欲をくすぐられているのに過ぎないのかも知れない。先日もらった委員会の辞令には「×委員に任命する。内閣総理大臣、橋本龍太郎」とある(シュールだ)。たまたまこれを研究室に置いておいたところ、同僚や学生が見て妙に感心している。別にみせる積もりでいたのではなかったのだが、彼らはめざとくそれを見つけて誉めてくれる。ということは、権力に弱いのは、案外私に限られないのかも知れない。

次期学習指導要領改訂にみる STS教育の可能性

大辻永(茨城大学教育学部)

学習指導要領の改訂は、戦後およそ10年毎に行われてきた。時代に促した教育課程を子ども達に提供するためである。現行の学習指導要領は平成の世の中になってすぐに定められたもので、そろそろ10年になる。新聞報道にもあるように、文部省はすでにその改訂作業に入っており、今年中(高等学校は来春まで)に新学習指導要領は告示される。学習指導要領の改訂が気にされるのは、教科書がこれに準拠してくるからである。では、次の学習指導要領はどのようなものになるのか。そのヒントは「教育課程審議会」という文部省の審議会の答申に現れてくる。この審議会の答申は、学習指導要領の中身を直接左右するものであり、教育関係者には無視できない答申なのである。教育課程審議会の最終答申は、7月29日に答申された。中身は、その前月に発表された「審議のまとめ」とほぼ同じである。ここではこの答申をヒントに、次の学習指導要領による新しい教育課程におけるSTS教育の可能性について、関連する改正点を中心に述べてみたい。

新しい学習指導要領に基づく新課程は、小中学校で2002(平成14)年度から全面实施され、高等学校では2003(平成15)年度から学年進行で移行していく。表は、年間の授業時数である。年35週というのが学校教育の相場であることを考えれば、一週間当たりの授業時数も見当がつくであろう。しかし、35では割り切れない箇所がある。これは、今回の改訂では今までになかった点の一つで、一年中固定された週決めの時間割ではなくなることを意味している。また、1995(平成7)年度から月に2回導入されている週5日制が、予定より1年早く、2002(平成14)年度から完全実施される。総授業時間数が減少しているのは、この完全週5日制の導入のためである。授業時間が減るのであるから、当然のように授業内容も削減される。新聞紙上にあるように、全体的におよそ3割が削減される。さて、このような厳しい状況の中で、STS教育を実施する余裕はあるのであろうか。

今回の答申に見られる次期新課程の特徴の一つに、「教科の枠を超えた横断的・総合的な学習」をする「総合的な学習」(実際の名称は各学校で決めてよい)という枠(厳密には教科ではない)を小学校3年生から高校3年生まで新設することが挙げられる。その内容も学校の実情に合わせて取り決めてよいことになっているが、例として挙げられているのは、国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉に関する内容である。これらは、「教育課程審議会」の親委員会である「中央教育審議会」で打ち出されている方向を実現しようとしているもので、「総合的な学習」は国是を実現しようとする枠組みといえる。無論、上記以外の事項を扱えないわけではない。「中央教育審議会」への諮問の段階(平成7年4月)では、「科学技術の発展等社会の変化に対応する教育」という表現があったわけで、「科学教育の一層の促進」という点が「教育課程審議会」の答申においても目玉の一つになっておかしなところであった。しかし、全教科にわたって削減の方向にある中、特定の一教科をひいきするわけにもいかなかったであろう。とにかく、新設される「総合的な学習」の枠は、STS教育を実施していく上で一つのねらい目になることは間違いない。否、冷静に考えれば、国際化や情報化、高齢化に対応した実践といった内容は一から作り上げなければならないのに対し、理科や社会科というベース、あるいはこれまで細々とではあるが積み上げられてきている実践のあるSTS教育の方が、この枠内で実施されることは比較的容易なことかもしれない。しかし逆に、「総合的な学習」は旗印であるがゆえに、学校管理者としては「学校をあげての取り組み」にしたいところであろうから、STS教育といった得体の知

れない実践よりは、初級英語や福祉・ボランティア活動といった目立つことを導入する方が実際は多くなるのであろう。

STS教育が実施されるのは、子どもの判断力も高まってくる高等学校レベルが中心であることには変わりないと思われる。高等学校では「情報」という教科が必修科目として新設され、その中に3科目が作られる。そのうち「情報C」は、「情報通信ネットワークなどの社会における役割や影響の理解に重点を置く」科目であることから、STS教育は一部分であるせよ、大いに実現されると見てよい。高等学校理科については、現行ではなかった必修科目が復活する。「『理科基礎』、『理科総合A』、『理科総合B』、『物理』、『化学』、『生物』及び『地学』のうちから、『理科基礎』、『理科総合A』又は『理科総合B』のいずれか少なくとも1科目を含む2科目」が必修になる。耳慣れない科目名「理科基礎」とは、「科学が、これまで自然の謎の探究・解明にいかにかに挑戦し文明の発展に寄与してきたかを知るとともに、過去の実験を再現したり、課題を解決する過程や、科学が直面している問題や科学と人間生活とのかかわりについて学び、科学的なものの見方や考え方を養う新たな科目」である。相変わらず科学主義的な傾向も見られるが、「科学史」という言葉が使われないまでも、ここでは科学史的な内容が今までに増して取り上げられることになる。「理科総合A」と「理科総合B」は、以下のよう

にまとめてみると、文部省の作文技術がわかって面白い。
理科総合A:「科学と人間生活とのかかわり」を中心に、物質やエネルギーなど日常生活と関係深い自然の事象を探究する活動を行い、自然を総合的に見る見方や自然を探究する能力と態度を養う。

理科総合B:「生物とそれを取り巻く環境」を中心に、生命現象や地球環境にかかわる自然の事象を探究する活動を行い、自然を総合的に見る見方や自然を探究する能力と態度を養う。

扱いによっては、これらの科目においてもSTS教育は実施できよう。必修科目の規定をみれば、高校生は以上の3科目のうち一つは履修することになる。STS教育のための時間的カリキュラム的な枠組は準備されたといつてよい。

しかし、授業に組んで生徒に教科書を購入させたにしても、実際は別の教科書で担当教師が専門とする科目を学習するということが、今までの例では山ほど見られる。実施できる時間的枠組みがあっても、実施する教師がいるかという問題が依然として残る。また、STS的な事項を多角的に取り上げたいと願う教師がいたとして、その意志をサポートするもの(例えば教材)がどれだけその教師にとって手に入りやすいかといった問題もある。理想的には、教師自身が様々な資料を独自の視点から収集してくれるのが望ましいとされるが、なかなか教師の日常に余裕がないのも事実である。STS Network Japanは、躊躇せず、STS教育の実践集や資料集をもっと手がけてもよいのではないだろうか。

次期教育課程において、制度的には、STS教育を実施する余地は増したと言えよう。しかし、それ以外の人的・物的条件は、今のところ何も変わりは見られない。

「STS Network Japan夏の学校1998」での発表では、上述してきたような新課程の話題の他、小学校理科の内容の構造についてプリント学習的に取り上げさせていただいた。

小学校の教科等の構成及び授業時数について（教育課程審議会中間まとめより）

【現行】

	1	2	3	4	5	6
国語	306	315	280	280	210	210
社会	-	-	105	105	105	105
算数	136	175	175	175	175	175
理科	-	-	105	105	105	105
生活	102	105	-	-	-	-
音楽	68	70	70	70	70	70
図画工作	68	70	70	70	70	70
家庭	-	-	-	-	70	70
体育	102	105	105	105	105	105
道徳	34	35	35	35	35	35
特別活動	34	35	35	70	70	70
総合 (仮称)	-	-	-	-	-	-
計	850	910	980	1015	1015	1015

【改定案】

	1	2	3	4	5	6
国語	272	280	235	235	180	175
社会	-	-	70	85	90	100
算数	114	155	150	150	150	150
理科	-	-	70	90	95	95
生活	102	155	-	-	-	-
音楽	68	70	60	60	50	50
図画工作	68	70	60	60	50	50
家庭	-	-	-	-	60	55
体育	90	90	90	90	90	90
道徳	34	35	35	35	35	35
特別活動	34	35	35	35	35	35
総合 (仮称)	-	-	-	105	110	110
計	782	840	840	945	945	945

中学校の教科等の構成及び授業時数について（教育課程審議会中間まとめより）

【現行】

	1	2	3
国語	175	140	140
社会	140	140	70-105
数学	105	140	140
理科	105	105	105
音楽	70	35-70	35
美術	70	35-70	35
保健体育	105	105	35-140
技術・家庭	70	70	70-105
道徳	35	35	35
特別活動	35-70	35-70	35-70
選択教科等	105-140	105-210	140-280
総合 (仮称)	-	-	-
計	1050	1050	1050

【改定案】

	1	2	3
国語	140	105	105
社会	105	105	85
数学	105	105	105
理科	45	105	80
音楽	45	35	35
美術	90	35	35
保健体育	70	90	90
技術・家庭	105	70	35
道徳	35	105	105
特別活動	35	35	35
選択教科等	0-35	50-85	105-165
総合 (仮称)	70-100	70-105	70-130
計	980	980	980

注）外国語は選択科目として位置づけられており、授業時数については各学年とも105-140を標準としている

高等学校の各教科・科目及び標準単位数（教育課程審議会・中間まとめ・審議のまとめより）

【現行】

教科	科目
国語	国語 / 国語 / 国語表現 / 現代文 / 現代語 / 古典 / 古典 / 古典講読
地理歴史	世界史A / 世界史B / 日本史A / 日本史B / 地理A / 地理B
公民	現代社会 / 倫理 / 政治・経済
数学	数学 / 数学 / 数学 / 数学A / 数学B / 数学C
理科	総合理科 / 物理 A / 物理 B / 物理 / 化学 A / 化学 B / 化学 / 生物 A / 生物 B / 生物 / 地学 A / 地学 B / 地学 /
保健体育	保険 / 体育
芸術	音楽 / 音楽 / 音楽 / 美術 / 美術 / 美術 / 工芸 / 工芸 / 工芸 / 書道 / 書道 / 書道 /
外国語	英語 / 英語 / オーラル・コミュニケーションA / オーラル・コミュニケーションB / オーラル・コミュニケーションC / リーディング / ライティング
家庭情報	家庭一般 / 生活技術 / 生活一般
	-

【改定案】

教科	科目	単位数
国語	国語表現 / 国語表現 / 国語総合 / 現代文 / 古典 / 古典講読	各2 各4 2
地理歴史	世界史A / 世界史B / 日本史A / 日本史B / 地理A / 地理B	2/4 2/4 2/4
公民	現代社会 / 倫理 / 政治・経済	各2
数学	数学基礎 / 数学 / 数学 / 数学 / 数学A / 数学B / 数学C	2/3/4/ 3/ 各2
理科	理科基礎 / 総合理科A / 総合理科B / 物理 / 物理 / 化学 / 化学 / 生物 / 生物 / 地学 / 地学 /	2/2/2 各3
保健体育	保険 / 体育	7-8/2
芸術	音楽 / 音楽 / 音楽 / 美術 / 美術 / 美術 / 工芸 / 工芸 / 工芸 / 書道 / 書道 / 書道 /	各2
外国語	オーラル・コミュニケーション / オーラル・コミュニケーション / 英語 / 英語 / リーディング / ライティング	2 4 3/4 4/4
家庭情報	家庭基礎 / 生活総合 / 生活一般	2/4/4
	情報A / 情報B / 情報C /	各2

STS情報

開催状況

東工大中島研究室公開セミナー
(中島秀人氏より)

「先端科学技術と社会」第23回研究会

科学技術の高度化は、それを受容する社会との間に、数々の解決すべき課題を提起しています。月例セミナー「先端科学技術と社会」では、先端科学技術と社会に関する刺激的な話題の提供者を毎回お招きし、年間10回のペースで研究会を開催しています。

例会の第23回は、マンチェスター大学のご所属で、現在科学技術庁科学技術政策研究所に滞在中のボーデンさんに、日英の技術政策の相違についてお話しいただきます。興味深いお話をうかがえると存じますので、ふるってご参加下さい。なお、終了後に懇親会を開きますので、ご予約下さい。

日時:1998年7月16日(木) 17:30 19:30

内容:NETWORK DYNAMICS IN ENVIRONMENTAL POLICY AND TECHNOLOGICAL

DEVELOPMENT: THE CONSTRUCTION INDUSTRY IN JAPAN AND THE UK

DR. Mark BODEN(Manchester Univ. & NISTEP)

会場:東京工業大学大岡山キャンパス・百年記念館・第5

会議室

東急目蒲線もしくは東急大井町線大岡山駅下車
正門入ってすぐ目の前の建物です。

世話人:東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島秀人

東京大学先端科学技術研究センター 大谷卓史

連絡先:〒152 目黒区大岡山2-12-1

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島研

究室

TEL/FAX 03-5734-3255

e-mail mag02214@nifty.ne.jp (IDが変わりました)

ちょうど学期が終わりますので、終了後は比較的大きな懇親会を予定しております。足の遠のいておられるかたも、のみ会にだけでもご出席下さい。多分、大岡山の居酒屋いろはでやります。

マイケル・リンチ 連続セミナーと講演会

・1998年7月21日-22日 午後1時-5時

於 早稲田大学 図書館会議室

セミナー「エスノメソドロジーについて」

・1998年7月23日 午後3時-5時

(明治学院大学大学院特別講演会)

「遺伝子治療を考える市民の会議」の報告書

STS 国際会議に合わせて行われたプロジェクト、「遺伝子治療を考える市民の会議」(「コンセンサス会議」)の報告書が出来上がりました。

実行委員各氏の報告論文と、会議の各種データ、STS国際会議でのシンポジウムにおける報告等が収録されています。

残部ありとのことなので、関心のある方は以下のアドレスでお問い合わせください。

若松征男<wakamats@i.dendai.ac.jp>

350-0394 埼玉県比企郡鳩山町石坂

東京電機大学理工学部

一般教養系列(社会学)

Wakamatsu Yukio

College of Science & Engineering

Tokyo Denki University

Hatoyama, Saitama 350-0394

Japan

phone:+81-492-96-2911 ext.3310

fax:+81-492-96-5132

また実行委員の方々は現在、次回のコンセンサス会議の開催に向けて活動中です。今度は「インターネット技術」をテーマにする予定です。

於 明治学院大学 ヘボン館 大学院会議室
「エスノメソドロジーと実践の論理」(仮題)

・1998年7月24日-25日 午後1時-5時

於 国立教育研究所 南館大会議室
ワークショップ「知識・科学・技術」

かつてガーフィンケルとともに研究をし、現在もっともアクティブに活動しているエスノメソドロジストである、マイケル・リンチ氏が来日し、上記の日時・場所でワークショップと講演をおこないます。

マイケル・リンチ氏はコーネル大学で社会学を学んだあと、カリフォルニア大学大学院在学中にガーフィンケルと出会い、その後、精力的にエスノメソドロジーの立場から、とくに「科学」という活動がどのように組織されるかについて研究を重ねています。彼の博士論文は、世界で初めて(ウルガーやラトゥールよりも早い時期に)、社会学者として科学実験室に赴き、そこでなにが行われているかを詳細に観察した成果をもとに書かれています。それは、後に(1985年)Art and Artifact in Laboratory Science (Routledge)として出版されました。また1993年のScientific Practice and Ordinary Action (Cambridge UP)では、アメリカ社会学会の「知識・科学・技術」部会が各年のもっとも優れた関連図書におくるロバート・マートン賞を受けています。

現在は、イギリスのブルネル大学の教授です。

・最初の早稲田大学でのセミナーは、通訳がつきます。

・参加費は 21日-22日 有職者 5000円
その他 3000円

23日 基本的に無料(明治学院大学大学院特別講演会として行われます。)

24日-25日 有職者 5000円
その他 3000円

とさせていただきます。

・また上記の他に、24日と25日の午前10時より、今回の招聘に関係ある科研費関係者による研究発表を中心としたインフォーマルなセッションをおこないます。関心のある方は、議論に参加してください。

・お問い合わせは、早稲田大学のセミナーと明治学院大学講演会については、

西阪 仰 (明治学院大学社会学部 Tel: 03-5421-5431/Fax: 03-5421-5697

E-mail: augnish@soc.meijigakuin.ac.jp)

に、国立教育研究所のワークショップについては、

上野直樹(国立教育研究所 Tel/Fax 03-5721-5057

E-mail: nueno@nier.go.jp)

をお願いいたします。

・くわしいセミナー・講演会の内容は、後日EMCA研究会、DEEのメーリングリスト等でお知らせいたします。

・今回のマイケル・リンチ氏の招聘は、文部省科学研究費基盤研究(c)「社会的活動に埋め込まれた談話の相互行為分析」研究プロジェクトの一環として行われるものです。ま

たセミナーとワークショップはEMCA(エスノメソドロジー・会話分析研究会)およびDEE(認知科学会「教育環境のデザイン」研究分科会)の協賛を得ておこなわれます。

海外の開催状況

Science, Technology and the Rise of Nature
4S (Society for Social Studies of Science) /ESAC Joint Meeting
October 26-November 1, 1998

Hotel Halifax

Halifax Nova Scotia, Canada

Conference Website: <http://plant.mta.ca/ssss/>

EASST (European Association of Social Studies of Science) General

Conference

Lisbon, 30 September-3 October 1998

Conference Website: <http://www.iscte.pt/EASST98>

海外の学会情報・その1

(中島秀人氏より)

最近の国際化の進展とともに、海外のSTS関係の学会に所属される方も増えて参りました。一方で、まだ入会の仕方が分からないという人も多いようです。ということで、本日から海外の学会の紹介と入会方法をご案内します。なお、大部分の学会は、会費をクレジットカードでも受け付けています。カードのない方は、郵便局の海外送金をご利用下さい(集配局で受付、大体1件が500円)。大部分の学会の会費には、学会誌代金が含まれており、おそるべきほど安く学術誌を手にすることができます。

今回は、EASSTのご案内。

EASSTは、European Association for Studies of Science and Technologyの略称で、日本語に訳せば「欧州科学技術論連合」とでもいうべきもの。STSの国際的組織の草分け的存在で、1982年に発足。当初は、名前の示すとおり、当時困難を抱えていた東欧のSTS研究者が西欧の研究者と容易に交流できることを目指していた。初代会長は、Bielefeld大学のPeter Weingart氏。第2代が、ご存知John Ziman氏。ザイマンが会長の頃までは、本当に手作りの組織といった感じで、会費集めもザイマン本人がやるような状態であった。

その後、米ソの冷戦が崩壊したことで、組織の性格が大幅に変化し、欧州を横断するSTSの国際組織となる。特に、イギリスのScience Policy Support Groupが事務局を引き受けた1991年以降の発展が著しい。欧州STSの主要学科がInstitutional Memberになっている。現在事務局はアムステルダム大学。欧州以外からも会員になれるし、事実会員も多いが、やはりメインは欧州。次回紹介するアメリカの4SがSister Organizationであるとのこと。1年おきに大きな研究発表会総会があり、4年に一度(だったと思う)アメリカの4Sと合同で実施される。今年は研究発表会総会の年で、ボル

トガルのリスボンで9月30日より開催。数百名規模の参加者がある。EASSTには学会誌がないが、Newsletterが年4回発行されており、書評なども充実度を増している。当初はArie Rip氏がNewsletterを何とか支えている感じだったが、隔世の観あり。たぶんEUの統合の影響も大きいと思われる。統一的な科学技術政策が求められているため。

入会申込

EASST membership application

c/o Science and Technology Dynamics

University of Amsterdam

Nieuwe Achtergracht 166

NL-1018WV Amsterdam, the Netherlands

fax +31-20-5256579 e-mail kwa@chem.uva.nl

home page <http://www.chem.uva.nl/easst>

会費 26ドル(43オランダギルダー)

学生及び東欧州会員に対する割引あり(特に申し出ること)

会長・Rob Hagendijk(Univ. Amsterdam)

ニューズレター編集長・Chunglin Kwa

注・入会申込の申し出の手紙は、

Dear Sirs and Madams:

I would like to join EASST. Please send me an application form. といった程度の英語で充分です。ただ、英語の手紙の書き方という本で、一応の作法を習得しておくことをお勧めします。

会員の出版物

以下のような特集に寄稿しました。ぜひご覧下さい。なお、詳細情報は、日経の7月29日号に収録されています。(中島秀人氏より)

季刊iichiko No.48 1998 Summer

特集・科学技術史の文化学

金森修 技術的環境構成の果てに

橋本毅彦 標準化技術の起源をたづねて

佐野正博 技術の技術的構成と技術発展

中島秀人 科学技術社会の未来を決めるのは誰か--マンフォード論

定価1000円。編集室連絡先 5565-5647

ホームページ <http://www.iichiko.co.jp>

文献情報

パティオで紹介された書誌

・金森修「サイエンス・ウォーズ」、『現代思想』、1998年7月号

・ネルソン「テクノナショナリズムの終焉」(大村書店) 技術を国家毎に論じることの限界を解明

・中野不二男「ニュースの裏には科学がいっぱい」(文芸春秋)

ニュースの背後に現れる科学を分かりやすく解説

・ハンチントン「文明の衝突」(集英社)

御存知文明の衝突論

・ミラード「エジソン発明会社の没落」(朝日新聞社、橋本訳)

・「ブレインズ・コンピュータのパイオニア」1,2(集英社)

・ヴァンダナ・シヴァ,高橋由紀・戸田清訳,『生物多様性の危機 精神のモノカルチャー』,三一書房,1997年。

(Vandana Shiva, Monoculture of the Mind, Third World Network, 1996.)

目次

第1章 精神のモノカルチャー

第2章 生物多様性の危機 第三世界の視点

第3章 バイオテクノロジーと環境

第4章 種子と糸車 技術開発と生物多様性保護

第5章 生物多様性条約 第三世界の視点からの評価

・ユイグ『スパイスが変えた世界史--コショウ・アジア・海をめぐる物語』(新評論)、3000円。

・ソニー広報センタ-『ソニー自叙伝』(ワック出版部)、1800円。

歴代の社長社長などの会見等を収めたCDロム付きの高いバージョンあり

・名和小太郎『科学書乱読術』(朝日選書)

やっぱり名和さんの本は面白い。よくまあこれだけまめに本を見つけるもんですね。

・コラータ『クローン羊ドリー』(アスキー)

「日経サイエンス」に書評がありました。事実関係とどまらず、いろいろ詳しいらしい。誰か読みました?

・シルヴァー『複製されるヒト』(翔泳社)

うちの従兄弟が翻訳したもので、つい書きこんじゃいます。中立の書評は先週の日曜日の日経にあり。

・盛田昭夫『Made in Japan』(朝日文庫、朝日新聞社、1990年)

うーん、古い本だし、ばかばかしいとは思いつつ読んでみると、それなりにうなってしまう。

・ディヴィス他『鉄路17万マイルの興亡--鉄道からみた帝国主義』

・Carl Mitcham, THINKING THOROUGH TECHNOLOGY, Chicago UP, 1994 ISBN 0-226-53198-8pbk

「人間は道具を作る動物である」というのは誰の言葉で、出典はどこでしょう?普通はref.なしで引用されているけれど、この本にはちゃんと典拠が出ています。それだけではなく、デッサウアーだのチンマーだの、ハイディッガーだの技術哲学の解説もあり。

・モレンホフ『ENIAC神話の崩れた日』(工業調査会、1994年)

ご存じENIACではなく、アタナソフの作ったマシンが最初のコンピュータであるということを描いた本。アタナソフが裁判で勝利を勝ち取るまでを描く。

- ・米本昌平「知政学のすすめ」(中央公論者)
- ・ローズ「死の病原体プリオン」(草思社)
- ・松田裕介「電話時代を拓いた女たち」(日本評論社)
- ・中目威博(なかのめ・たけひろ)『北京大学元総長 蔡元培』里文出版、373頁、2500円

「近代中国の教育や学術に大きな足跡を残した、蔡元培(1868-1940)の本格的な評伝」。東工大の科学史の研究室に、楊艦さんという20世紀の前半の中国における物理学の制度化について研究している留学生がいますが、彼からよくこの人物の名前を聞きました。

- ・森谷正規『文明の技術史観-アジア発展の可能性』中公新書、680円+税

帯の宣伝には、次のようにあります。

「80年代後半から急成長を続けながら97年、にわかの大混乱に陥ったアジア経済は立ち直るのか、またその課題とはなにか。この問題を考えるには、技術文明が今どのような段階にあるのかの認識が必要である。すなわち、産業革命以降、英、独、米、日等によって担われてきた技術文明は、20世紀後半、成熟期に入った。「技術の爆発」である。アジアは仕上がった技術によるモノの市場・生産の場として最適の舞台なのだ。技術の観点からみる近現代史。」

- ・ラスロー・タール「馬車の歴史」(平凡社、1991年)、4800円プラス税。

車輪の登場から古代の戦車を調べていて、異常に便利でした。考古学的考察、および関連の図版にすぐれています。こういう新しい成果を吸収してシンガーの技術の歴史の改訂版が出されるといいんですが。

ホームページ情報

小川正賢氏より

このくらい短いと、うちの学生さんにも読んでもらえるでしょうか。Gibbonsのモード論のエッセイです。

<http://iir1.uwaterloo.ca/MOTW96/summer96/MichaelGibbons.html>

すでにみなさんご存知のものなのでしょうか？

会員の消息

野村 元成氏より

各位さま

このたび長年の(準)学生身分を終え、信州大学人文学部に着任しました。(調さんの同僚、正確には彼がボスです)。自由な時間を比較的与えられたこの機会を活かし、きちんとした仕事しようと思っておりますので、今後ともよ

ろしくお願いいたします。

寒がりです、遠い昔の大学受験期には東京以北の大学を無条件で志望校から外したという経験を持つものにとつての信州暮らしのイメージは、心踊るというわけにはいきませんが、ここは開き直って、スキーもできるし、温泉めぐりなんてのもできるのかも、などと楽しめるものは楽しむつもりです(なお、自宅住所が“浅間「温泉」”となったのは、半分は偶然です。

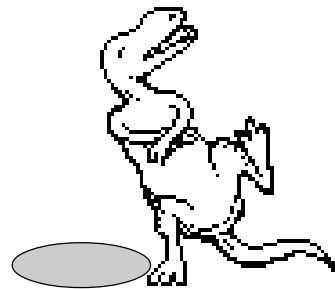
勤務先

信州大学人文学部

〒390-0802 長野県 松本市 旭 3-1-1

電話 ; 0263 - 37 - 2423 (直通)

Fax ; 0263 - 34 - 4171 (人文学部共通)



編集委員からのお願い

会員の皆様には、各種情報をお寄せくださるようお願いいたします。

特に、会員の皆様の関わられた出版物、報告書の情報をお知らせください。また、会員消息の項目も充実させたいと思っておりますので、お知らせください。今回も多数の方々から情報を提供していただきました。ご協力どうも有り難うございました。

なお、情報は、事務局宛あるいは、skasuga@mars.dti.ne.jpまでお送りくださいますようお願い申し上げます。

< 編集委員・春日 匠 >



編集後記

みなさま、残暑いかがお過ごしでしょうか？
予定より一ヶ月ほど遅れての、第二号です。
住所録も先送りですし（ごめんなさい）、第二号でこれでは、ちょっと先が思いやられますね（オマエが言うな！）。

記事の内容も、本当は中島さんと大辻さんをメインに、審議会情報の見方や官庁WebSite利用法みたいな特集も考えていたのですが・・・。

なにしろ現在ただ一人の編集者である私が南の島にいるもので、十分な情報が集められず、断念しました（そう、この編集後記も実は小笠原の父島からお送りしています。...といったって、映像もなんもないのでみなさんは面白くも何ともないでしょうが）。

ご要望があればそのうち企画を復活させます。そのほか、ご意見、ご感想はなんでも春日<skasuga@mars.dti.ne.jp>か事務局あてにお願いします。

次号は年内には発行の予定です。

それでは！

Newsletter Vol.9, No.2 (通巻No.32)

1998年10月1日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter編集委員会

代表 平川秀幸 / 委員 春日 匠

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 平川秀幸

<<http://http://kob.is.uec.ac.jp/sts/>>

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒182 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1

電気通信大学情報システム学研究科

小林信一研究室気付

TEL/FAX 0424-43-5666

（事務局の電話番号が変更になりました

ご注意下さい）

E-mail: sts@kob.is.uec.ac.jp

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN